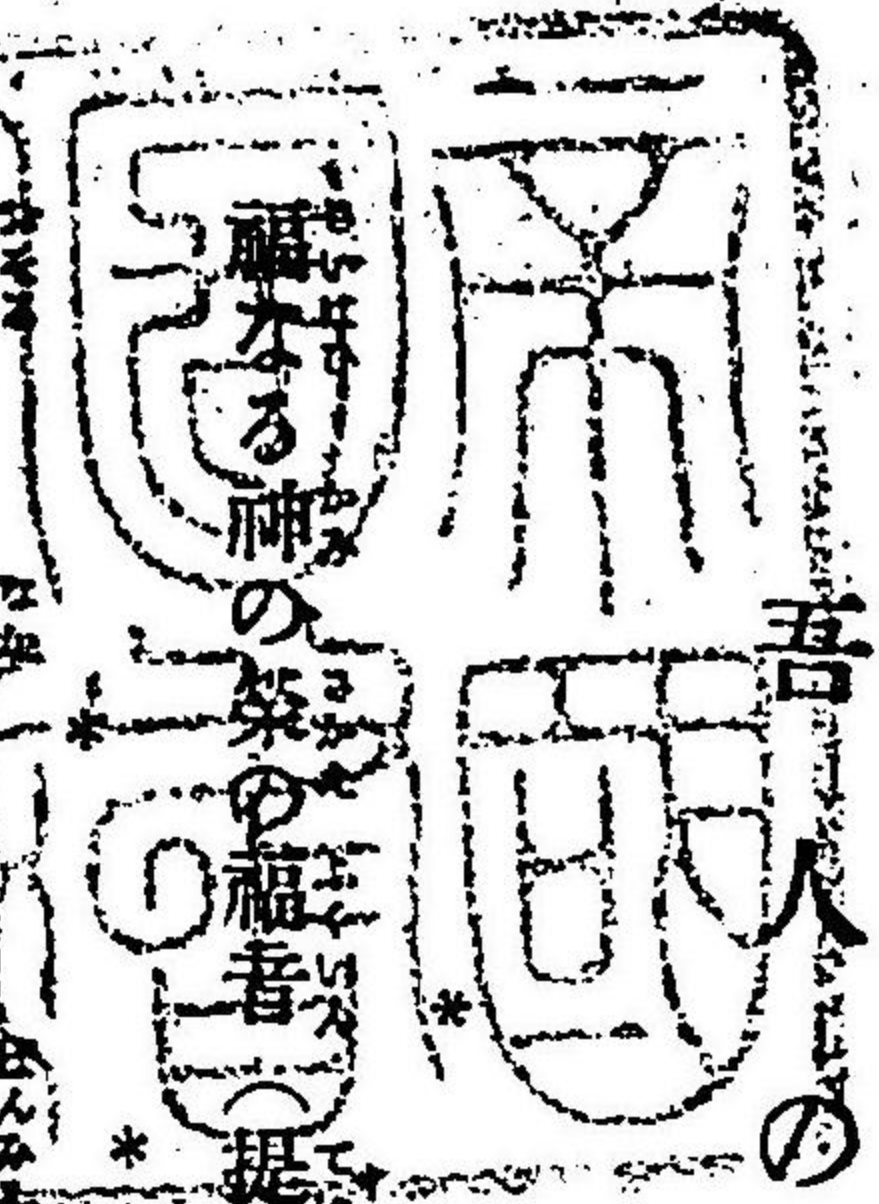


サザエーシ博士述
吾人の福音

259
758

吾人の福音

サヴェージ博士述

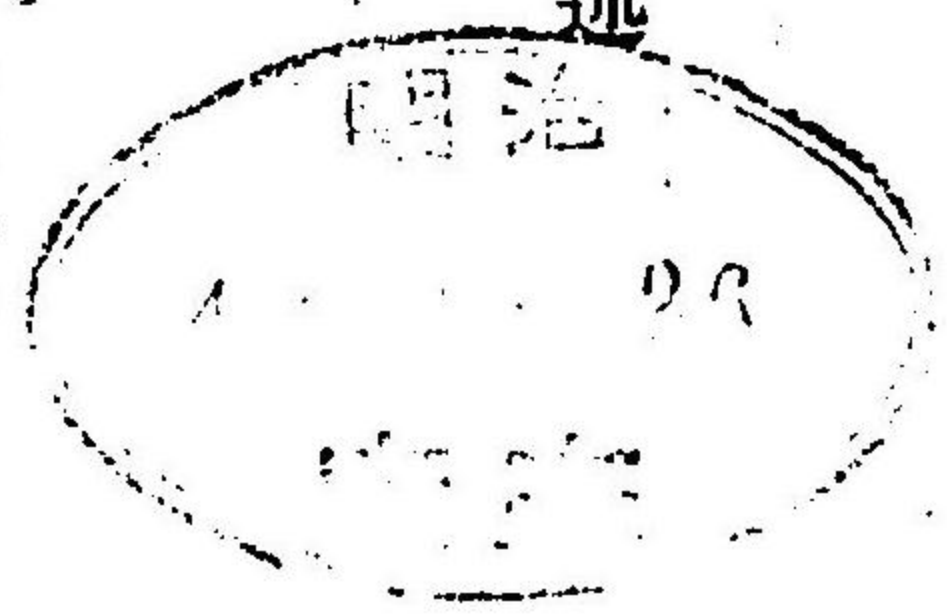


福音なる神の榮の福音(提前一〇十一)

懼ること勿れ、われ萬民に關りたる大なる喜の音を爾曹に告ぐべし(路二〇十)

基督教の或宗派は自ら稱じて「福音」即ち喜の音は彼等の専有する所なりとせり、彼等の主張する福音は一種特別なる意義を有する神の喜の音にして、其禮拜式に名くるに「福音的禮拜式」を以てし、其讚美歌にも亦「福音」讚美歌を以てし、各種の集會は皆同じく「福音」の名稱を冠せざるなし。

之に對して或他の宗派は、これ決して福音的に非ず、彼等が説く所は人の智慧と哲學にして、到底神の喜の音を人類に表明宣言すること能はずと暗黙裡に彼等を否認するが如し。そは孰れにせよ、一種特別なる意味を以て、唯自らのみ福音なる神の榮



の喜しき音を所持するものなりと宣言する教會は耶蘇が其最も大切なる使命として其宣言の陣頭に掲げたまひし「天國は近けり」神の國は汝等の裡に在り」て天國を現在に置かずして却つて耶蘇が宣言せざりし未來に之を置けり、而して其周圍には耶蘇が設けたまはざりし障壁を建て、其門には、耶蘇の命じたまふことなかりし番人を置き、耶蘇の語りたまふことなかりし暗號語を造りて其出入を嚴にせり。福音書を按ずるに、全福音傳中只一箇處のみ耶蘇が神の國を相續すべきものと然らざるものとを區別したまひし所あり、それとて或目的を以て耶蘇は父の國を相續すべきものを其右の手に受入れて、形式的に羊と山羊とを區別するが如くにすべしと説きたまへり、然れどもこゝに最も注意すべき價值ある點は今日の教會に於て現に唱えられ居る條件の一も耶蘇自身の口より出でしものに非ざること是なり、彼はこの國に入るには或特別なる信仰の形式を承認する必要ありと説きしことならず。彼等が神に關し、彼自身に關したまふ人の起原と性質とに關して或形式的の意見を有すると否とは天國に入るまで必要の問題に非ず、而して彼が設立せる條件、少なくとも耶蘇自ら斯る事情の下に、最大切にして本質的なる一の條件を定めざるべからざりしと想像すれば、其一

條件は、最も單純なる人の品性と人の義務とに關するものなりしや明なり。予は必要ならざる限り他人の信仰を非議せんとするものに非ず、爭論上止むを得ざる限りは一の例をも引證せんことを好まず、只定義の形に於て出來得る限り明晰ならんために之を簡單に説明し以て吾人の位置を示し、榮ある神の福音は吾人の注意に委任せられたるものなることを證明すれば予が目的や達すべきなり。故いかにとなれば吾人は永く眞理を所有するものと云はんより、寧ろ批評家として眞理を求むるものとして考へられ。道に上り道を指導するものなりと云はんより寧ろ道を見出さんとするものなりと考へられき、又其使命を自ら所有することが如何に光榮なることかは未だ充分に吾人には解せられずとせられたればなり、而して吾人は斯る世の誤解を解きこの福音を種々なる束縛より解放して現代の社會に渡さんことは吾人の負ふべき最も重大なる責任なりと感ずればなり。されば予はこゝに暫く過去の基督教會に保持されたる信仰箇條の中心點たる僅少のもののみを論ぜんとす、而かも予の目的は之が眞偽を判定せんとするにあらず、又僅かの論文にては斯る高尚なる問題は容易に論じ盡さるべしとも思はず、只此等の信仰が

過去、現在に於て自ら「福音的」と稱する教會の保持する所たるが故に果して其信仰は「福音」の「音」て宣言に適實なるべきか否か、又果してこの宣言は此等の舊き教會をして特別に耶蘇の福音を表明するに足るべき有効のものなりや、また此の貴き任務は寧ろ吾人に委せられしものならずやを論究せんとするに在るとを讀者諸君の預め注意せられんことを希ふ。尙一言本論にすゝむに當りて前に挿まざるべからざることあり、それは忠實に熱心に舊き信仰を抱く讀者諸士の、彼等に許す誠實の念を予にも許したまはんことなり、希くば予をして宗派心に驅られたるものとするに勿れ、予は全心を擧げて神の眞理を發見し、宣言し其味方たらんことを彼等に許す如く予にも許したまはらんことなり。

先づ初めに黙示てふ舊信仰に關して述べしめよ、予は想像す、この問題たる、若し神存在したまひて其子等を愛したまふならんには吾儕が歩むべき道を見出すに足るべき充分の光明と指導なくして吾人を見棄てたまふことなかるべしと承認するもの、如く、然らば或時或形式に於て一の黙示が世に示さるゝことを待望するや自然のことたり、この黙示に關し舊き信條の説く所は何ぞや、簡單に之を説き試みん。

口碑的計算によれば殆んど四千年間神は天使や預言者や感應せられし記者等を通じて、其眞理の僅少部分を只僅少なる範圍に住する國民にのみ現示したまへり、其他の世界の人々は、到底神の眞理を識別すること能はざる程に惡變したる自然的理性の薄暗き光に従ふの外なくして、只能ふ限り自ら其道を見出さざるべからずして暗黒裡に彷徨し跌倒するの外あらざる状態に放棄せられたり、然るにこの四千年の末に當り、一層廣大にして且新しき黙示現はれたり、基督教は所謂文明世界の統治權となれり、尙ほこの基督教が殆んど二千年間存立するに至りても、この黙示は地球上に生活する住民の三分の一以上に及ばず、其他は皆以前の暗黒裡に彷徨、蹉跎の生活を繰返へしつゝあるなり、こゝに於てか吾人はこの所謂黙示は現代の學者と高尚なる思想を有する數千の人々に黙示として承認すべからざる如き言葉に隠されたるか又斯る方法によりて説かれたりとせざるべからず。之に反し聖書を以て神に關する粗野なる觀念を以て初まり文明の進歩につれて漸々善良高貴の理想に到達せるもの、記録なりとする批評家はこの所謂黙示は孰の所にも人の有限なること、缺點あること、を感ぜざるを得ずとなせり。されど批評家が考ふる、現世界に興えられたる、黙示の觀念に従へば人

類はアダム、イブの夢が伴つて人心に入りしより以前少なくとも十萬年、否恐らくは二十萬年以前に世に現はれたりとなす。然らば此等無數の歴史以前の男女は一人も舊信仰によれる默示を受くることなかりしとせざるべからず、若し之にして眞實なれば、所有默示は善き音とすること能はずと讀者諸氏の考へたまふべきは疑ひを容れず、然り人の言葉を適當に用ひなばそは決して福音と稱すること能はざるなり、而して斯る福音は總ての子に公平なる愛をそそぎたまふ神の方法として望むべからざることをせざるべからず、然らば斯る默示に關する教義は善き音に非ず、隨つて福音と稱すること能はざるなり。

次に吾人は舊信條に定められたる神の性質に關し簡單なる評論を試みんと欲す。神は無限にして全智、全能、全愛なりと説る。而かもこの全能にして萬民を救ひ能ふ神は其光明と救濟の恩澤とを唯少數なる人々にのみ與えたまへるものなりとせらる。彼は善なりと説かる而かも數千年間「力これ權利」主義の具體化なりと宣傳せられたり。例せばポロロは「何人なれば神に言逆ふや、陶人は同じ塊を以て一の器を貴く一の器を賤く造るの權あるに非ずや」と云へり。然り、吾人も亦陶人の土塊に對する

權力を承認すされど、土塊は飽まで土塊にして、一の器を貴く一の器を賤くするも土塊には何等の價值を左右することなかるべきを以てなり、若しさもあらずして、其器にして自ら感ずるの力あり、永遠の苦痛に堪え得るものならん時、尙ほ陶人は之をしも其好む所に従つて土塊を左右すべきや、若し之をしもなし得べきものなりとせば即ち神は其無限の慈善を表明するために、其被造物の中より之を救ひ彼を滅さんとする撰擇を壇にし、其正義と憤怒とを表明するの方便として人類の最大多數を殊更に長く永遠の苦痛に苦しめたまふことありとせば、一方に於て神を無限の愛を有するものなりとの觀念を承認すること能はず。之に反して吾人は、宇宙と其中に生活する凡ゆる被造物を創造したまひし無限の神は少なくとも彼の力に相當する責任の下に在り、即ち正義と愛の性質を有したまふ責任の下に在りと信ず、又吾人は永遠の神も惡をなす權利なきことを信するなり。

若し神にして信條の中に誌されたるが如く單に其好む處に従つて人を幸福ならしめ或は苦しめたまはんには、人の正邪の標準より算するも、假令彼は無限の力たり得んも無限の善たるを得ずと言はざるべからざるを覺ゆ。

テニスンの「失望」てふ沈鬱にして物怖き詩を記憶せずや、其中に神に關するこの觀念に關係したる句あり、

「われらによく務めし、かの久遠の愛は、永遠の地獄を造れるが故に久遠の殘忍と呼ばん哉

吾儕を造り、われ儕を前知し、われらが運命を預じめ定めて、其意に委せたまへりとよ、

殘忍の母よ、吾儕が呻吟をさかんより寧ろ死せる方よかりけむ」

温情掬すべき高貴の詩人が、輕浮なる出來心に從つて世界を支配する神の觀念に對する嫌惡の情を表示せるはやがて以上の如き句となれり、この詩を讀まん人、誰か怖ろしき舊き信條に對する公訴狀を讀むの思あらざらんや。

若し宇宙に斯る種類の神ありとせば、吾人はなさねばならぬ故に無理にも吾人の頭を彼の前に屈むることあるべし、されど彼を善と呼ぶことによつて、溫和、信實にして且つ慈悲慈愛的なる吾人の感情を蔑視することなかるべし、若し斯る神あるを信ずとも、彼の御座の下に禮拜を捧ぐるることなかるべし、否寧ろ彼の前に直立して彼の

怒の電光に打たれなん、若し斯る神ありとせば、確かに事實の宣言は喜の音たらざるべし、否この憐むべき罪に沈み失望落膽して喪神せる世界に齎らされたるものは最も悲しむべきの音たるのみ。

次には舊信條の主張に關する人の教説なり、舊信條によれば人は六千年の昔完全なるものとして創造せられたり、チャールズ第二世の時老サウス博士はソクラテスもブラトンも單にアダムの墮落せる殘屑にすぎずと主張せる程アダムは完全無缺に創造せられたり、而かも舊信仰によればこのアダムは最初の試誘に對して既に墮落せり、尙ほ

彼が墮落せるのみならんには吾人は之に反抗もせず奇異とも考ふることなかるべし、されどこの最初の人なるアダムの墮落はやがて未だ生れざる數億萬人の墮落とせられたり、小兒が生るゝや纖弱にして無邪氣なり、而かも彼等は生れ來れる其時既に神の御怒に觸れ居るなり、而のみならず彼等には正義を辨識するの能あるなく、之を撰擇するの力あるなし、若し彼等にして永遠の憐恤に預からんには神の恩恵を特別に受け

ざるべからず。斯くして無數の人靈は生存の潮流に押流され、吹流され、慘憺たる永久の時間に、一刹那を経る毎、苦悶の激浪逆卷く死の瀑布に投入さるゝまで急ぎすゝ

ひなり。予は小兒の頃、月毎に催さるる傳道資金募集の音樂會に列席せり、其時の演説をさくに傳道の大動機として考ふべきは、毎瞬時、時計の針の進む毎、數千の異教徒は永遠の怖ろしき深淵の裡に投込まれつゝあることなり、と。果して然るか、斯くても人類は愛あり智ある神の創造せしものなりとせざるべからざるか、若し然らば吾人は止むを得ず、この事實を承認すべし、而してこの避くべからざる事實の前に頭を屈すべし而かも吾人は斯る使命を宣傳することを以て喜の音となすこと能はず、真理と正善とは斯る事を福音と承認せずと斷言せざるべからず、これ豈に萬民に告ぐべき大なる喜の福音ならんや。

次には化身の教理なり、予はこの化身の教理を救濟方法の一部分と見、又之に伴ふ論理上の成果とみるべき耶蘇の性質に關する問題をこゝには論究せざるべし。四千年間神は全力を盡して人を救はんとすと假定せられたり、彼は預言者、天の使前驅者たちを遣はし又人に彼の意志を記録するやうに感應を興えたり、而して其結果として四千年の終に當つて少數人民の彼に従順なるもの生じたり、されど尙ほ大多數の人は神の真理と彼と彼等の關係に就きて五里霧中に彷徨せり、彼等は頑迷なり、

固陋なり、不從順なり、茲に於て、神は自ら地に降臨せしませり、彼は人の形をとり、人となりて苦難に遭遇し教訓し、三十年間の生存の後屈辱的の十字架上の死を遂たり、後彼は甦りて高く天の御座に昇りて神の右に座せり、又彼は其教會を組織し、教會に告げ感應するため聖靈を送り、世界を救濟せんがために傳道の働に彼等を指導せり、而して紀元後十九世紀間及ぶ限りの力を盡して人類を救濟せんとすと承認せらるる斯の如くにして其今日に於ける結果は如何ぞや、斯る驚くべき默示と化身との奇蹟の結果も尙ほ人類三分の一をも彼に聽かしむること能はず、其三分の一も尙ほ悉く彼を信するに非ず、注意せざるものは數千を以て數ふべく、教會の内部に於てさへ斯る救濟の方法は樂觀すべきものに非ずとするもの多し。予は言はんとす、若しこの教理にして真理なりとせんも、そは人類の歴史に於て最も驚くべき、悲むべき失敗の歴史にして福なる神の喜の音として宣傳すべき福音に非ざるなりと。こゝに一言附加したきは人間の運命論なり、こは既に以上論ぜし所に含有せらる、神は能ふ限りの總ての計畫を建て之を救濟せんと企てたまふたるも人類の最大多數の運命は殆んど想像も及ばざるまでに悲惨なるものあり、斯る思想の困難なる、音に彼等

に比して光明あり愉快なる信仰を有する人のみならず、この同じ舊思想を抱く人々にも尙ほ、垂首して言葉を出すこと能はざる程に其解釋の困難なるを思はしむべし。フイラデルフィアのアルバート、バーンス博士は其當時プレスビテリアン教會の卓越なる指導者なりしが、左の言をなせり、其要旨に曰く

「友人等は予に語るにこの問題に光明を見出さんことを以てせり、而して彼等の解明をさし、可成彼等を解せんことを務めたり、されど世の状態を観察し、幾億萬の生靈が全く注意せられず、冷淡に放棄され永遠の死に降下するを見、彼等を救ひ得るものは唯神のみにして實際之を救はざることを思ふ時、われは茫然自失するものあり」と云ひ、尙ほ附言して「わが靈には總て黑暗々々たるなり、われ之を詐ること能はず」と。然らば若しアルバート、バーンス死せずして今こゝに在りたらんには彼も亦予が言に和して、例令之を眞理として承認せざるべからざるものならんとも、恩恵ある神の喜ばしき福音として之を宣傳すること能はずと言ふや必せり。

予は信ず、總ての教會内に在る信者の多數は最早斯る教理を信ぜず、又斯る怖ろしき神と人と其運命に關する觀念とを放棄せしむべし、而して又此等の思想を拒絶する

ことを其親友に告白する特別の事情に在る人々の多きことを認め、然り然れども彼等が文明世界に大教會の總ての大信條として傳播されてある間、例へば聖公會が其監督院を通じて其信者に對し解釋の不動なるは信條の本質に在り而して舊き意味は永久に變ずるとなかるべしと布令する間又總べての正統派教會中に在りて最も自由なる傳道會社なるアメリカン、ポールド、がこの世に於てキリストのことをさかさざりし異教徒は次の世に之をささくの機會あるを望むと云ひし故に異教徒中に派遣すべき宣教師を拒み居る間、又總て此等の教説を基礎として所謂福音同盟會が組織され居る間は、此等の教説は舊き教會の一般的信仰なりと唱ふるの權利ありとせざるべからず、若しこの言にして眞實なりとせば確かに舊き教會は常に耶蘇の福音の專占權を有せざるのみに非ず、全然耶蘇の福音を宣傳し居らずと云はざるべからず、誤つて福音と名づけられて彼等の宣傳するものは悪しき科學、偽の哲學、傳説、野蠻なる觀念、迷信等より組成せられしものにして、イエスの福音の代りに耶蘇に關したる計圖なりとせざるべからず、今や吾人は福なる神の榮ある喜の音を世に宣傳し、世をして眞正の天父の福音に接せしめざるべからざる責任の吾人の肩の上に置かれたるを感ず。

吾人は今や進んで吾人が榮ある福音の積極的方面に關し少しく説く所あらんとす。先づ黙示に關する吾人の教理より説くべし、吾人も聖書と稱せらるゝ偉大なる書に、祝福ある觀察、真理、黙示等の含有するものなることを拒むものに非ず、されど吾人の主張は神の言葉は只或書籍にのみ制限さるべきものに非ざること、是なり吾人は孔子の口を通じても真理の顯はれたることを主張せんとす、又吾人は信ず、神の黙示の幾部分は釋迦牟尼に保證せられ、ペルシヤ人に對してはゾロアスターありて神の使命の幾分を現はしたりと、而して神は世の初より爾來彼の祝福ある真理に傾聴して其意味を執へんとせし其子に對して自身を黙示したまへるなり、普天の下卒士の濱、時の上下を問はず神の黙示は人が受けあたふ範圍に於て示されたり。吾人は最も深遠なる意義に於て世に一の宗教より外あらざりしことを信ず、總ての人は其居る處に神を喘ぎ求めて、彼等相當に神を見出せりと信ず、神は決して其子の一人も暗黒に彷徨し墜落することを許さず、世に顯はれたる總ての真理は皆神の黙示に外ならず、若し天文學者にして星宿、系統を見出さんとして天體を學ぶとき彼はケプレルと共に「オー神よわれは爾の思想を繰返へして考へんのみ」と叫ばざるべからざるべく、若し歴史に

して明瞭に記されたらんかそは神が國民の始原、發達、壞亂、繁榮に如何に干與したまふかの其方法を知るべく、又道德性の發達、良心の成長を研究する時には神の正義の律法が其子の心と生活とに如何に黙示さるゝかを讀むべく、若し又人類の生活に未だ具體的に表現せざりし、より善良なる、より高尚なる、より麗はしき事項に關する閃きと報告と理想とを執ふることあらんには神の書籍の新しき頁を繰かん時、其處には一層進歩し、一層發展し、一層完備せるバイブルを讀むことを得んとすの豫想をなすことを得べきなるべし。

總ての光が太陽より發射さるゝ如く凡ゆる真理は神よりぞ來る。瓦斯の光、電氣の光、鐵格中に炎ゆる石炭、又は薪木の火より出づる光、ダイヤモンドの光耀等、如何なる媒介を通し、又何處に現はるゝことも此等の凡ゆる光は皆太陽より來るなり、之と同じく、真理にして支那人の唇頭より來るも、遠島の中に住する人より來るも、異教徒にあれ、基督教徒にあれ、其唱ふる所にして真理ならんには、これ取も直さず神の真理なり、人の精神の修養に資し、人生生活の發達を助くる凡ゆる真理もまた神の黙示の顯現なり、されば神は決して彼の子を光なくして見棄てたまはず、又神の真理は何

處に在りても神の言葉なり、而して真理と證明せらるゝ限りには不可誤のものたるなり。

是は善き音と稱するの價値あらざるや、吾人は神は特別に偏愛をなすべき愛人を有するに非ず、彼は只指導の光明を吾人にのみ與えたまふのみならず、外に居る總ての人類にも遠き古代より今日に至るまで彼等の能力に隨つて神の真理を受くるの才幹を與えたまふたることを信ず、神は世が彼を受くるに適するや否や彼等に現れたまふなり、彼は常に戸の傍に立ちて、番に此處のみならず、印度にも支那にもはた世界の何處にも戸を敲きたまふたり、彼は心には真理として心胸には愛として品性には正義として顯現したまふなり、吾人が不注意にも異教徒と稱せる人々の幾百萬は神の手に書れし神の使命を讀み、神の入來を待たんとして彼等の自然の戸を廣く開くことを得たりき。

神に關する吾人の教理は何ぞや、吾人は信ず彼は單に無限の力なるのみならず又無限の愛なり。彼は其造りたまへる各子を愛し其無限の心胸に近く彼等を保ちたまふなり、吾人は神と其子等の間に大なる溝ありて超自然的の橋梁を梁せざるべからざるも

のありしを信ずること能はず、彼は脈膊の打つよりも吾人に近く、吾人が考ふる思想よりも近く、心に秘むる秘密なる感情の最も秘密なるものより尙ほ近く吾人に接近したまふなり、神は單に凡ての力なるのみならず、又全き愛なり、吾人が幾萬年の時代を通して、初めて其眼を天に仰ぐの人を見ん時、神は彼の時彼處に在りて彼を導びき彼を助けたまふことを知るべし、若し彼最初の人其生活に躋き、其言葉に囁囁ことあらんか神は其子を言ひ難きの温情と注意とを以て其心胸に抱きたまひしなり、神は其造りたまひし各子の父にして剎那も其愛を忘るゝことなく、常に其子をしてより高く、より善良なる生活の方に其苦悶中より引上げ導びさすゝむ慈父なりと信ずてふ言葉は福音に非ずや。

次には人の始原と其性質に關する吾人の教理を論ずべし。吾人は六千年以前エデンの樂園に完全なる人創造せられたりと信ずること能はず、吾人は又歴史の公道を辿り行きて人は進歩し來れるところをみれ、墮落せることを認むること能はず、時代の後時代を追ふてすゝみ溯れば吾人が發見するエデンの園は叢林に外ならず而して人類の始祖なるアダムは偉且完全なる代りに動物界の境地近き野蠻なることを見出すべし、

彼は動物と區別すること甚だ難く只儼かに新しく見出したる足にて立ち新しく見出したる手にて握り、無意味なる響は聲に變し、彼の日より今日に至るまで總ての人類の進歩發達の根本、動力たる眼を擧げて上下左右を顧みつゝ永遠の疑問を初めんとするを見るべし、實に墮落なし、神の眞理の科學的默示によりて證明する所によれば未だ嘗つて墮落せし人あらず、若し未來神學の隅石たるべきものを置けよと云へば「人の向上」を以てせざるべからず然り、不明なる久遠の昔より以來人は、無智にして動物的なりしものが、涙に洗はれ、血を濯ぎ、蹉跌、顛倒、幾度か、起きては倒れ、倒れては起き、限なきの過失を繰返へしつゝ又これ等の過誤を改めんとして無限の忍耐を以て勵みながら進化し來れる人の向上を認むべし、歴史以前の久遠の昔時に在りても尙ほ人は克己の結果として、今日に存する如く世界の基礎を築きたり、此等の人はこゝに向上進歩の未彼等の代表者としてホメロス。ソクラテース。アリストトレス。プラトンの。キルギル。ダンテ。ギョーテ。シエークスピア。を出し精神的方面の人として孔子。ゾロアスター。釋迦牟尼を出し、彼等凡ての上に卓越して、温和憐恤にして其人の前には神の子、慈悲の高調産出として膝を屈むべき耶蘇を出せり。

然り、人は愈々高くすゝみて、人性に於ける總ての高貴なる所を表明するに足るべき斯の如き名と斯の如き品性と斯の如き功績とを示せり、斯くて「今吾人は神の子なり而かも未だ達すべき點に達し居らざるよ」と叫ぶとを得ん、そは、尙ほ一層高く、一層善く、一層麗しく、一層偉大なる神的景想にすゝみ得ん日にはこの悶むべき人類も全く變化し榮光を現はすものとなり得べければなり、然り、人は開發的に動物よりすすみて、心に、智に、良心に、精神的に昇り行けり、孰れの處に於ても人が自己の主となり境遇を制御し、なづかしき眼を天に仰ぎて、いと高きものゝ子なることを自覺せし例は數千を以て數ふべし。

之は是れ吾人が人の始原、性質及び進歩に關する教理なり、これ、祝福ある神の福音、喜の音と稱するに足らざるや、これは感應に充ち居らざるや、その内に吾人が熱情を炎すものなしとせんや若し吾人にして斯の如き使命に感激したらんには之を以て全世界の各人民の裡に、各市に各村に各家に之を宣傳するまでは満足することなかるべからざらんや。

次に問ふべきは耶蘇と其化身とに關する吾人の教理なるべし、予は明白に云はんとす、

この予が言即ち耶穌は吾人と同じく人にて生れ、吾人と同じく人にて死せる人なりと云ふ時、これ必ずしも予一箇の私言に非ずして即てユニテリアン主義のために語るなりと云ふことを得べし。われは彼は「單なる人」なりとは云はず、彼は「單なる人」てふ言葉にて表明すること能はざる程の深さと高さと偉大とを有するものなることを知ればなり。われは又「吾人と等しき」人なりとは云はじ、然りシエークスピアも、ダンテもソクラテースも吾人と等しき人なりと云ふこと能はざるなり。彼は少なくとも現代の人々より其天才と天賦の品質と、其時代と世界とを制御するの力に於て卓越せしものありとせざるべからず、予が耶穌を人なりと信ずるは決して彼の品性を賤するに非ずして却つて人類の價値を高むるなり、耶穌を指して人以上となすもの多くは人の最も劣等なる模倣によりて彼を律せんとし其人てふ範圍の中に彼を排し能はざるか爲めなるを見る、されど予は耶穌を見て彼の中に吾人の達し得べきものを認むるの率る勝れるものあるを思ふや切なり。福音傳の初に誌されたる耶穌の降誕、幼時及び其生活は到底ナザレに生れたる彼と一致すること能はざるべし、若し彼の兄弟等にして耶穌が超自然的に神なるを知りたらんには悉らく彼を信ぜざるの理なかるべし、其母にして若し宇宙の久遠者を抱けるを知りしならんには、其發達の早さと非凡の智慧とを見て驚くの理あらんや、然るに耶穌が十二歳の時尙ほ獨り彼を殿の中に残すことを恐れたりと云ふに非ずや、矛盾も亦甚だしからずや、之を思へばマリヤが通常以上に彼を観察せし福音の記事が吾人の信任を得ること能はざるは當然なりとす。彼が勇壯義狭なる行爲と其死に關する記述を見て吾人は愈々彼れの人なるを信すべし、若し彼にして宇宙の全能なる神ならんには如何てか其所謂世界に降臨せる大目的を遂行せんとする大事に向つて之に畏縮するの要あらんや。彼を神とせば十字架の光景や全く演劇的なりとせざるべからず。仰ぎ見よ十字架上に於ける彼は今や臨終に際して彼を殺害せんとせし人々の爲に「彼等そのなす所を知らざればなり神よ彼等を許したまへ」と祈り、現在の怖ろしき状態を考へては其盡せし使命に疑を存じ、恐れ戦き「わが神わが神何ぞわれを棄てたまふや」との悲痛の叫をなせり、死の怖るべき手に攫まれ今や靈の肉を去らんとする時、死も尙ほ勝ち難き大信仰を久遠の神に礎え、之が爲には命を鴻毛の輕さに比し、この同じ信仰の道に萬民を誘はんとして其命を捧げたる彼を思へば、誰が敬虔、信賴の念を以て彼の前に跪づき、御身をわれらの友

し、其母にして若し宇宙の久遠者を抱けるを知りしならんには、其發達の早さと非凡の智慧とを見て驚くの理あらんや、然るに耶穌が十二歳の時尙ほ獨り彼を殿の中に残すことを恐れたりと云ふに非ずや、矛盾も亦甚だしからずや、之を思へばマリヤが通常以上に彼を観察せし福音の記事が吾人の信任を得ること能はざるは當然なりとす。彼が勇壯義狭なる行爲と其死に關する記述を見て吾人は愈々彼れの人なるを信すべし、若し彼にして宇宙の全能なる神ならんには如何てか其所謂世界に降臨せる大目的を遂行せんとする大事に向つて之に畏縮するの要あらんや。彼を神とせば十字架の光景や全く演劇的なりとせざるべからず。仰ぎ見よ十字架上に於ける彼は今や臨終に際して彼を殺害せんとせし人々の爲に「彼等そのなす所を知らざればなり神よ彼等を許したまへ」と祈り、現在の怖ろしき状態を考へては其盡せし使命に疑を存じ、恐れ戦き「わが神わが神何ぞわれを棄てたまふや」との悲痛の叫をなせり、死の怖るべき手に攫まれ今や靈の肉を去らんとする時、死も尙ほ勝ち難き大信仰を久遠の神に礎え、之が爲には命を鴻毛の輕さに比し、この同じ信仰の道に萬民を誘はんとして其命を捧げたる彼を思へば、誰が敬虔、信賴の念を以て彼の前に跪づき、御身をわれらの友

われらの兄弟、來るべき日の暗示者なれ、實に神の子、吾人が達すべき理想の人の子なりと讚歎し渴仰せざるものあらんや。

されば吾人は神の化身は單に一人の歴史的人物に限らるべきものに非ずして、仰ぎて天を眺めし最初の人より漸次人類全體に及ぶものなることを信ず、世界の造られし日より以來今日に至るまで、美なるもの、眞なるもの、高きもの、貴きもの、此等一として神の顯現と其恩恵ある力とにあらざるなからんや。年進むにつれて神の人類に化身するや大なり、而して耶蘇の品性と其生活とに於て天父と一なりとの自覺を示したまへるは即ち吾人々類も神と共に一なるに至らんことを望みしものと同一の自覺なるや明らかなり。若し然らずして、彼は人に非ず、人中の最も神的なるものに非ずとせば吾人は彼を模範とし理想とし彼に等しからんことを望み能はざるべし、アウトトルツクの記者にしてブリマウス教會のライマン、アポット博士は數年前其論文中、神と耶蘇と人との間に區別を見出すこと能はざることを誌せることありき、其議論や見るべきものあり、彼は云へり、神は人無限にして人は神一無限なりと、耶蘇は人は神たり得べしと云ひ得る範圍に於て神なり、然らずして全能の神獨り耶蘇に於ての

み神たることを制限したまひたりとせば、最早耶蘇は完全の人、理想の人たり得べからず、「汝等神の完全が如く皆完全なるべし」と彼が教えしは、やがて人類の達し得べき完全に非ずとせざるべからざることとなるべし、豈に斯る理あらんや、豈に斯る理あらんや。

次に一言の附加せざるべからざることあり、人類の運命に關する吾人の福音是なり、吾人は舊信仰にて謂ふ所の、死は外より惡靈の襲ふ所としてこの世界に來れりとも亦人類が犯せる罪に對する神怒の結果なりとも信すること能はず、否これは生と同じく自然にして神の永遠普及なる律法の一部なりとせざるべからず、死後の六分は死前の六分と異なる所あらず、この死の經驗に於て人の運命を定め、試練を限るものありと云ふに至つては何の意たるかを推するに苦しまざるべからず、人は永久、原因結果の法則に支配され、この法則の下に在りて其品性と自己の天堂地獄を、自ら造らざるべからざるなり。

救濟に關する吾人の教理は何ぞや、吾人は或形式を有する信仰簡條を承認することによりて、吾人の品性を變じ得べしとも信せず又聖餐に列することや、首に水と膏とを

注ぐことによりて内心の變化を來すことありとも信ずること能はず、はた品性を以て救濟の條件となすことさへも信ずること能はず、否吾人は品性即救濟なりと信ぜんとす。予も嘗つて天堂地獄を想像して、瞑目せん曉にはこの死の門を通じて行くべき所は冥暗恐怖の地獄に非ずして過去の光榮を以て輝く聖人たちの住みたまふ天國に至るべしとの救濟に關する舊き觀念を有したることなきに非ず、されどこの世と人性とを學ぶこと益々深きに從つて斯る淺薄にして幼稚なる思想に満足すること能はざるに至れり、みよ、世には金錢の購ひ得るものを以て其家を充たし、美術品あり、書籍あり樂器ありて其趣味を満足せしめ、僕婢は伏して其意を迎へ、殆んど心の欲するまゝならざることなきも尙ほ胸に悲哀を堪え、心に苦悶を藏する者あり、又一方をみれば身は陋巷茅屋に住し、食は僅に飢を支ゆるに足り、書籍なく繪畫音樂の慰藉品なきも尙ほ喜の歌を歌ひ心平靜の中に樂しむ者あり、此に於てか知るべし、救濟は決して其居る處に存せずして其心に在りと。グラント將軍は其晩年に及びて「オールド、ハインドレッド」及び「ヘール、ツー、ザ、チーフ」の二曲に深き趣味を寄せたりと稱せらる、されど其趣味を感ぜし以前に在りて之を聽き之を知らざりしに非ず而かも其當

時は聽きても之が味を解すること能はざりしなり。誰か盲目を導びき一望千里の櫻花爛漫の光景を瞻望すべき吉野に至るものあらんや、誰か讀書の嗜好なき者を導きて萬卷の珍書を藏する圖書館に至るものあらんや。人幸福ならんことを望まば其趣味、感情、慾望及び境遇を察せざるべからず、然り幸福は確かに其心の調和に存す、若し人完全に生理的に心理的に道徳的にまた精神的に宇宙と諧調を保たんと欲せば其心琴や美妙なる幸福の音聲を發すべきや必せり、若し精神界に於て幸福ならんことを欲せば精神的能力を發達せしめ精神的嗜好と感情とを涵養せざるべからず、吾人は到底この世界より脱れ出ること能はず、斯くして遂にはオマール、カイヤムが妙句の眞理を味ふに至るべし、彼歌へり、

「天とは慾望満足の幻影にして

地獄とは焦熱中の靈の影に外ならず」

ジエームス、ラッセル、ローウエルもこの秘密を咏じて曰く

「御身は自ら之を作るにあらずは美を見ること能はざるべし、

男子も女子も自然も皆、精神が其姿を映すの鏡たるにすぎず」

この世に在りては各々の思想、感情、目的、行為に相應すべき當然の結果あることを目撃すべきなり、斯くして吾人は神の不變なる原因結果の法則の下に各自の品性を建設しつゝあるなり、吾人は決して死後直ちに宇宙的幸福の忽焉として現出する意味に於て萬民救済を説かざるべし、吾人はこの世又如何なる世にても人の時く所は必ずや其獲る所なるを信ず、神の法則を犯す人焉を其結果を免るべけんや、只神の久遠の法則を見出し之に従順なるものゝみ初めて真正の平和を見出すべきなり、東洋に古き一の寓話あり、以て説き來りし點の眞理を證するに足るべし、曰く、新しく肉體を離れし一の靈ありて他界の不案内なる路を辿れる時しも、後追ひ來る人の足音に驚ろかされ、後を顧みれば、いと怖ろしげなる怪物を認めぬ、彼は戰栗しつゝ「何物なりや」と尋ねしに、其答ふ所は「われこそ御身自身が働の姿なれ、夜を日に續きて御身が跡を追ふのみ」と。

こゝに吾人が救済と人の運命とに關する教理の要點を説けり、斯くて吾人は神の全能と全智、全愛は何時か、何處にか總ての靈を彼のもとに來らしめたまふべきを信ず、若し必要あらんか人間の罪惡を脱却し得べきために義罰を與へ之を鞭撻したまふことあるや少しも怪しむに足らざるなり。

總ての人は皆神の子なり、神や其慈愛の手を出して彼等を抱きたまふべし、假令迷ふて彼を離れ去るものありとも尙ほ彼は恩愛の心にて彼等が後を追ひたまふべし、若し彼の法則を見出し彼に従ふの子には平和と幸福並び至るべく、善人となく惡人となくいづれは彼の許に復歸すべしと宣言する福音は神の喜の音とすること能はざるか、詩人ホイツチアも亦云はずや。

「海にても陸にても
 など神の害あらん。」

「掌にもやし似たる棕櫚生ふ
 島は何處とも知る事難き

ことあるも

彼のめぐみとたすけより

いかで離るゝことあらむ」

斯る重大なる使命を天下に宣傳するの任務は吾人の肩上にあり、吾人はこゝに眞正なる福音ありと絶叫せざるべからず。

以上説き去り説き來れる所を略言すれば、神は決して其子を只迷ふまゝに見棄てたまはずして何等かの指導の方法を授けたまふなり、されば神と人との間に超自然的なる橋梁を架するの必要なかるべし、又神は世界を放棄したまふことなし、世人にして之を自覺すると否とに關らず神は常に世界を保持したまふなり、人の罪惡たる只之によつて一層高尚なる智慧を得、靈性と品性を發達せしめんがための方便にすぎず、苦痛配慮、死等はた人間及び神の敵に非ずして却つて吾人を導びきて最善最良の理想に達せしむべき機會たり。實に神は愛なり、生命なり、智慧なり、而してこの總によりて世界と人間とを永久に彼に近接せしめんことを務む。これ吾人の福音なり、誰か敢て之を神の喜の音とすることを拒むものあらんや。

「神御座にます、
世界ために平安なり」

友よ。同じく宗教を信ずるの徒よ、若し吾人にして理性の首肯するに足るべき默示、神、人、耶穌、宇宙及び運命等に關する教理を信ずることを得ば神は其聖なる手を吾人が頭上に按じて祝福を垂れたまふべし、斯くて吾人は世に暗黒に彷徨する人、恐怖に戰栗する人、神を認めざる人、自己の價値を誤解せる人、彼方此方に迷ふて道に倒るゝの人あらん限りはこの福音を宣傳して彼等に神の喜の音を聴かしめざるべからず、吾人は西の端より東の端に、北の端より南の端に至るまで苟も人家のあらん限りこの神の福音を宣傳しては止まざるべし。

吾人の福音終

明治四十二年十一月二十一日印刷
明治四十二年十一月二十五日發行

發行者兼
翻譯者

東京市芝區三田綱町四番地

神田佐一郎

印刷人

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

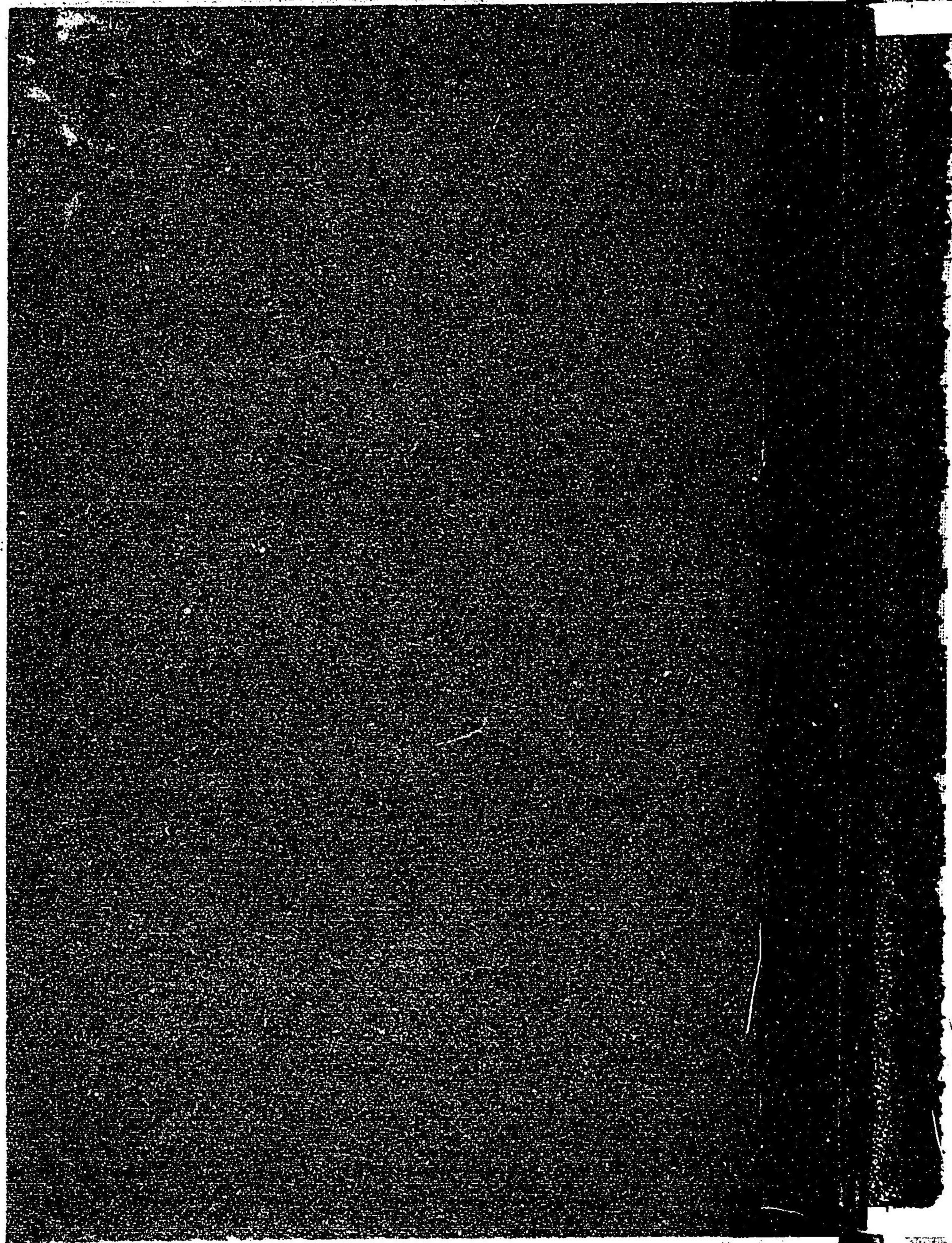
三秀舍

東京市芝區三田四國町二番地第六號

發行所

東京市芝區三田四國町二番地第六號

F 66



9
2

吾人の福音

サヴェージ

国立国会図書館

020645-000-9

特49-222

吾人の福音

サヴェージ/著

M42

ABI-0461



特

